

AOGS及びCOSPAR出席報告

元宇宙科学研究本部教授
小山 孝一郎

●AOGS(第3回アジアオセアニア地球物理学会)

AOGS出席 7月10日—14日にシンガポール(Suntec Singapore International Convention& Exhibition Center)で開かれた第3回アジアオセアニア地球物理学会に出席した。このシンポジウムは今回は初めての出席である。Space Weather sessionオーガナイザーのひとりである、Bhattacharyya博士(インドムンバイ地磁気研究所所長)の講演依頼を受けたものである。

8月9日(土)早朝9時30分Air Chiana422 便で成田をたち、北京を経由して定刻の21時30分にシンガポール空港に到着した。

8月10日(月)8:30よりSpace Weather session に出席

このセッションはINPEの老研究者R.P.KaneのReview (Sun-Earth Relation:Historical Development and present Status)にはじまった。

ここでは強い地磁気擾乱、Forbush decrease とオゾン層との関連、宇宙線と雲との相関関係に関する話が興味を引いた。天文学の分野の宇宙線と気象学、電離圏物理学が徐々に関連づけられつつある。地磁気擾乱前に見られる電離圏電子密度の増加が報告された。これに関しては私たちも気付いていたが結論は出されていない。

11日9:20—40に"Satellite observation of storm time variation in electron density and temperature in the low latitude"と題して私の講演を行った。この研究はすでに公表されており、今回の招待はこれをセッションオーガナイザーの Bhattacharyya博士が見たからであろう。これまでの地磁気嵐の電離圏の研究はほとんど電子密度のみを議論しており、電子温度を議論した研究はほとんどない。あっても其の観測値が信用できず電離圏への磁気圏からのエネルギーの定量的な見積もりがなされていない。我々の結果はまだまだ最終目的の定量的な見積もりには遠いが少なくとも手法を提案したものとして評価されている。

12日 午後から始まったVertical coupling of thermospheric E region to MLT and plasmasphere-Magnetosphere Regions のセッションに13日夕方まで出席した。

この間、惑星科学のセッションでの木星の衛星イオに関する招待講演をきいたり、地震電磁現象の講演をきいたりした。

総じて科学衛星観測の台湾の台頭が目立つがコスパーと比べると魅力的な講演が少ないとの感じをうけた。日本は残念ながら地球周辺の研究成果に新しいものがない。

●コスパー

7月16日(日)北京に移動

17日 セッションC0.2 (MSO D.Rees,DSO K.-I.Oyama) をD.Rees と小山で議長をつとめた。首都大学東京藤井教授がC0.2 session で1st Authorである'Simple tether rocket mission'を代読。

19日

13:00-14:00 C0.2のEditor としてEditor's meetingに出席

18:30-20:30 IRI国際標準電離層タスクグループBusiness meeting

20日

10:15-10:30 Planetary Science sessionで柿並、渡部の論文代読

18:30-20:40 Commission C(B.Schunk Chair) business meeting 出席

2008年のCOSPAR提案されたセッションが余りに多く幾つかのセッションをマージするのに時間がとられた。

21日 IRIセッションに終日出席

X.Liu and S. Watanabe 論文代読

総評 21日のIRIセッションで中国、韓国、台湾の発表が目立った。特に韓国はKOMPSAT、台湾はROCSATのすばらしいデータを出してきている。これらの分野で日本から新しい結果が出てこないのは残念である(衛星がないため)。中国、インドの台頭は脅威ですらある。インドは宇宙科学予算に制限をもうけない。中国研究者もきわめてよい研究環境にあるといっている。早急に日本の宇宙科学予算を増やさないと、これまでのように日本の宇宙科学が世界の最先端を走ることは難しく、その誇るべき研究分野の一つを失うことになるだろう。アジアにおいてすら其の位置が危うくなりかけているという危機を今回の会議を通じて感じた。

謝辞

財団の援助でそれぞれのシンポジウムでの役割を無事おえることができました。ここに深く感謝するとともに、今後もこの援助プログラムを継続していただけることを希望します。



座長であったC02の聴衆

首都大学東京藤井教授論文代読